

南相馬4河川、農業利用可

セシウム川底沈着、流出わずか

広島大調査

福島第1原発から16、38キロ離れた南相馬市を流れる4河川の水は、ほとんど放射性物質を含んでいないことが、広島大学院工学研究院の静岡清教授(63)の調査で分かった。放射能セシウムは川底の土に沈着し水に流れ出にくい状態という。静岡教授は「農業で使っても作物に影響がないレベル」とし、南相馬市で3月中旬に

も住民向けの説明会を開く予定だ。原発事故から半年の2011年9月から昨年12月まで、静岡教授は南相馬市で10回の調査を重ねた。真野、新田、太田、小高川の計21カ所で水と川底の土を採取。広島大に持ち帰って、セシウム濃度を機械で測定した。水1リットルあたり0.3、0.8程度で、国が定める飲料水の基準値10倍より

低かった。セシウムは粘土質の土にくっつき、一水にはほとんど流れ出ない」と静岡教授。全市的に自粛している農業については「川から水を引いて農作物を作っても問題はない」と説明する。4河川の水は事故前から、飲み水には使われていない。

一方、上流の川底の土は、セシウムの濃度が1キログラムあたり2万5000、1400程度。2万5000程度は、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故(1986年)で隣国ベラルーシが立ち入り禁止にした地域と同じ汚染レベルだ。

南相馬市は4月から、市内の全農地や用水路を2年がかりで除染する。それが終われば、川の水を農業に使うことは可能という。ただ、川底の土の処理についてはいまのところ、有効な手段が見つからない。市農林放射線対策課は「国から具体的な方法が指示されていないため、対応できない」と決意は固い。

静岡教授は、住民の内部被ばくを調べるため、尿の放射性物質も分析した。被爆地広島大学の科学者として「ヒロシマの蓄積で得た測定技術を駆使し、正確な数値を伝えることができることが安心につながる」と決意は固い。

【平成25年5月17日 環境委員会配布資料】
衆議院議員 荒井 聡

除染水処理で溝

相馬市「より慎重に」

福島第1原発事故の除染で出る放射性物質を含んだ水の処理をめぐり、環境省と相馬市の見解が分かれている。同省は「放射線量がある程度低ければ排出して構わない」との立場。市は「放射性物質濃度を極力下げないと市民が不安がる」と異を唱える。除染水の排出基準がなく、両者が一致点を見いだせずにいる。

環境省「簡易で十分」

相馬市は放射線量の比較的高い玉野地区を中心に住宅の除染を行っている。対象は約150軒でうち約100軒(10月26日現在)を終えた。屋根などを水で洗い流して排水を回収する。水は1軒200〜300リットル必要で、放射性物質濃度は1リットル当たり300〜400リットルに上る。

環境省は水の処理について「不純物を沈殿させ、水周辺の空間放射線量が低くなれば上澄みを排出して問題ない」(水・大気環境局)と簡易な処理で十分との考えを示し、市に伝えている。

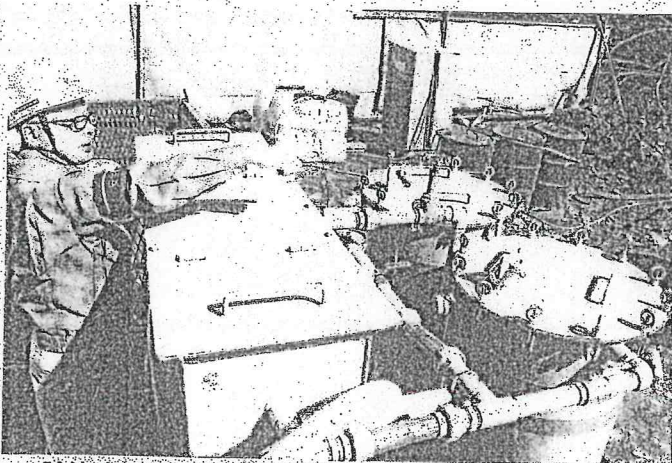
市は慎重で、水をもみ

放射性物質排出基準なし

殺とイオン交換物質に通して浄化する装置を独自に整備し、濃度を水道水の濃度基準に当たる10リットル以下に下げた地元の川に流している。立谷秀清市長は「排水は河川で拡散するので、ここまでしなくても安全だろうが、市民の安心感を得ることを優先した」と説明する。

浄化装置の整備費は約400万円。国は「過度な処理」と見なし、今のところ国費で賄う考えはない。このため、市は除染費全体をやりくりして整備費を上面した。国は10リットルにしなくてもいいと言いが、住民感情

市「浄化装置費、国負担を」



除染水の浄化装置を使って放射性物質濃度を下げる担当者

は異なる。国の責任で予算化してほしい(民生部)と要望する。除染は原発事故がもたらした新しい課題で、除染方法は明確にしてもらいたい。基準が染水の排出基準はまだ設けられていない。環境省断し、歩み寄りなく、基準を作れば、検査状況になっている。

除染は原発事故がもたらした新しい課題で、除染方法は明確にしてもらいたい。基準が染水の排出基準はまだ設けられていない。環境省断し、歩み寄りなく、基準を作れば、検査状況になっている。